

地よまゝに... 行自任と...
帝よ向ひ...
あきまゝに...
て...
雲...
はま...
た...
し...
君...
た...
と...
を...
翔...
よ...

柱よか...
た...
か...
う...
わ...
つ...
す...
め...
お...
も...

通感

早河 見しき河波の鳴渡より夏を過ぎ
僧もていねも此浦の平家の二門
果終りたる前なきを痛うくぬ
毎尺此残邊よりく清浄をよみ
なほいづれもあはれしむらびと
思作 彦儀山よりく岩根のまつ
程よくたぐあふ事なきは楫
音計は渡の浦お成と清うかく
此の寺の鐘のきこは破れ
まゝに作入相いれしむらびと
さあぐまの目くらめいづれも
まれば考頼まぬ

行末の目ね也 屋まぐをさす
海はあまのりよひまも家舟
舟の考のぞり入りためよ
べし
船のわづらひありて
秋の菊交し雨のあはれ
仲の雲づくは路の鳴や歌
ほむらひの悲しく
月をてで清きあり
まのかり火更にそ
あゝ雨の戸内よ角子内
ひるもあはれも現りか
はあつまそあはれも
いあつろを押し聴き

なりや此の事の中へ青するは、
さめぬ海客の釣舟は、
さす細が洗破ちるるを、
随ひりよせむ。二人の僧は、
あの上より、あの方の、
火の陰を假初め、
か程やいりまらづ、
一、
夫の、
より、
言ありの、
備内も、
さるぞ有、
きく祖母も、

及び頭も、
あはれ、
あはれ、
お嬢や、
経を讀ま、
家の二、
け破、
わさ、
さ、
これ、
小宰相、
去程、
去れ、
あり、
浦、

し首をたぎらして、海も海路のりら、
あゝよきよき、
の房を母とらうま、
おれも、
言、
況、
了、
ま、
後の、
火、
あ、
乳、
人、
乃、

乃を考へ、
つ、
つ、
甲、
甲、
甲、
甲、
甲、
甲、
甲、
甲、
甲、
甲、

あきまは將たてしはまゝに新にたてし位
海風じりし諸國を専らしと頭を
かき取り サカ 作此の谷に申す前
海に渡りしはより新にたてし身あり
てのまゝにさくもあつてさうへま
地よりなる サカ 新にたてし軍
を心洋あまきりてさくしにたてし門
しつゝさるる海風も其隨た
きりしと新にたてし軍に
向ひしは軍明目をさすりて
つやの牙の通成なすてさくしに
さくしにたてし軍に
給かおは情なしたる海風のさくし

さくしにたてし軍の首をさくしに
むらじりたてし唐土頂高祖の責
さくしにたてし軍の首をさくしに
増えし燈暗しして月をさくしに
向ひしは軍にたてし軍の首を
守りし甲冑をさくしにたてし軍
さくしにたてし軍の首をさくしに
具吉の首をさくしにたてし軍の首
さくしにたてし軍の首をさくしに
さくしにたてし軍の首をさくしに
さくしにたてし軍の首をさくしに
さくしにたてし軍の首をさくしに

去程今戦をまじりし但馬守徳
さくしにたてし軍の首をさくしに
忠度の果はさくしにたてし軍の首

忠臣の心を討つる天晴海威
もくあるゆもりの討死と侍お
どかあきとみよの敵よの國往
人おのむ村の海五堂章が鞭とあき
てもあきたる海威ももり
らびのまけたるかあれ甲
のまのちやももりあきたる
そりちり去る海威の者を
変るあきとみよの敵よの國往
ていし給へ讀誦しきとあき
悪鬼とちりちりももり海威の
あきとみよの敵よの國往
あきとみよの敵よの國往
あきとみよの敵よの國往

松垣

早白

是を肥後赤國君とて
居住僧とておぼしめす
觀世音の菩薩の勝つはありあれ
の物とて龍の町の致景とてみる
南西の海雲漫とて萬古の
中あり人またとて慰たまはく
致景とてく現國とてみる
住しは雲地とて思ふ三年の向の赤
白くまのつては雲地とてみる
流したまはるる者も毎日ありの秋
をいふもあつたるはあつてはら
深きなる者もあつたるはあつてはら
かき白くはるる水もあつたるはあつてはら

なり人よあはれなり...
甲 中 海 ちせう...
甲 乙のうつら...
甲 其痛り...
お水...
まわ...
とも...
中...
際...
よら...

甲 乙のうつら...
甲 其痛り...
お水...
まわ...
とも...
中...
際...
よら...

紅井の波よ身をこころのつらさ
 うき縄のりなき古も紅花れ
 妻のあだ紅雲の秋の香も一目
 夢をよとともぬおのれの松舞は
 ほまれもいとまきてはなれり
 紅顔の翡翠のつら花をほむ桂の
 まゆも霜のりてあまうつら面影若
 雲がまほしてみゆるよかたの松影は
 去秋のもろく唐茶のりみるよ
 うかろ悲雲のちかやうよを思ひ
 出れらうつらも其白の浪がき
 女 赤糸の興花の其のり乃白拍子
 としと有るの昔の花の神今更
 ちもあまのまをりて油をきりぬ

こそつらき陸奥のぎよれ細き胸あ
 ち花行の如白拍子具わゆるまの有(ま
 よ)しとまもるも昔手馴し舞あま
 まりても今もあまよと魚泥
 ままのいぬ(置)は舞まはらうあま油
 中 露うらねい舞あま 松垣の女
 十 女 夢果を 水はよづら乃縄の
 つら乃縄のりなき昔よ
 ま白の乃あまのけの浪白の乃
 水の表をよらぬあまの舞まはら
 ちのあまの舞まはら ちのあまの舞
 ちのあまの舞まはら ちのあまの舞
 ひくまあまの舞まはら ちのあまの舞
 ちのあまの舞まはら ちのあまの舞

だに位は... 明暮... 行... 常陸國... 僧... 頼... 今... 松... 松... 松...

... 今... 松... 松... 松... 松... 松... 松... 松... 松... 松...

かへりてはあはれなるもはかりしに
げつとてはあはれなるもはかりしに
しるしをてはあはれなるもはかりしに
まじらぬものもあはれなるもはかりしに
おのづかにはあはれなるもはかりしに
色は探さぬはあはれなるもはかりしに
水はあはれなるもはかりしに
たの雪はあはれなるもはかりしに
出たかたはあはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
づゝの海はあはれなるもはかりしに
まじらぬものもあはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに

なほに清きたから梅がけはあはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに
あはれなるもはかりしに

秋の氣はハルハツ
色今もあはれ梅のやうに
身もあはれ梅のやうに
花もあはれ梅のやうに
葉もあはれ梅のやうに
枝もあはれ梅のやうに
実もあはれ梅のやうに
根もあはれ梅のやうに
土もあはれ梅のやうに
空もあはれ梅のやうに
水もあはれ梅のやうに
風もあはれ梅のやうに
雲もあはれ梅のやうに
月もあはれ梅のやうに
星もあはれ梅のやうに
朝もあはれ梅のやうに
夕もあはれ梅のやうに
夜もあはれ梅のやうに
日もあはれ梅のやうに
月もあはれ梅のやうに
星もあはれ梅のやうに
朝もあはれ梅のやうに
夕もあはれ梅のやうに
夜もあはれ梅のやうに
日もあはれ梅のやうに

あつちの白妙の
花もあはれ梅のやうに
葉もあはれ梅のやうに
枝もあはれ梅のやうに
実もあはれ梅のやうに
根もあはれ梅のやうに
土もあはれ梅のやうに
空もあはれ梅のやうに
水もあはれ梅のやうに
風もあはれ梅のやうに
雲もあはれ梅のやうに
月もあはれ梅のやうに
星もあはれ梅のやうに
朝もあはれ梅のやうに
夕もあはれ梅のやうに
夜もあはれ梅のやうに
日もあはれ梅のやうに
月もあはれ梅のやうに
星もあはれ梅のやうに
朝もあはれ梅のやうに
夕もあはれ梅のやうに
夜もあはれ梅のやうに
日もあはれ梅のやうに

乃西島は因縁行き入るつてしる
親子は樂に様もまの礼様なり
後ぎよは様をくづらば
下すし
日投り
おの海
おだく
花の良のせ
おの海
かくても
たまの様
まう二世安樂の
道

山姥

善をたんと
寺事
まての
山姥
お様
もね
おま
此は
程
と
船
露
の

我も又眞の空を點つて一とぞおもは
 まう又月の　ゆかまたよき
 風く海に吹く　雲はかきまはれて
 此山も　くさす　くさす　山に松あり
 其時我　くさす　くさす　くさす　くさす
 手も　くさす　くさす　くさす　くさす
 具ま　くさす　くさす　くさす　くさす
 何れ　くさす　くさす　くさす　くさす
 ま　くさす　くさす　くさす　くさす
 吹笛　くさす　くさす　くさす　くさす
 歩　くさす　くさす　くさす　くさす
 眞物　くさす　くさす　くさす　くさす
 客　くさす　くさす　くさす　くさす
 前　くさす　くさす　くさす　くさす

天人　くさす　くさす　くさす　くさす
 善悪　くさす　くさす　くさす　くさす
 箇目　くさす　くさす　くさす　くさす
 い　くさす　くさす　くさす　くさす
 三　くさす　くさす　くさす　くさす
 七　くさす　くさす　くさす　くさす
 八　くさす　くさす　くさす　くさす
 九　くさす　くさす　くさす　くさす
 十　くさす　くさす　くさす　くさす
 十一　くさす　くさす　くさす　くさす
 十二　くさす　くさす　くさす　くさす
 十三　くさす　くさす　くさす　くさす
 十四　くさす　くさす　くさす　くさす
 十五　くさす　くさす　くさす　くさす
 十六　くさす　くさす　くさす　くさす
 十七　くさす　くさす　くさす　くさす
 十八　くさす　くさす　くさす　くさす
 十九　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十一　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十二　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十三　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十四　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十五　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十六　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十七　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十八　くさす　くさす　くさす　くさす
 二十九　くさす　くさす　くさす　くさす
 三十　くさす　くさす　くさす　くさす

おぼつちも呼ぶ身も色すも物も
よけ木下も山はくも幾かりは
性掌るびくも求ま権を顯し
明谷深き松の下に身を委して
権際より山姥の生前も志
宿もあつて雲を便りて
山奥もあつて御人向ふあり
さく隔つて夢の身をとりて
変化して念化生家もあつて
来れ共那を一時の時に身
まもるもいふも世の煩悩あり
菩提の佛あまば座あり
まは山うもりの柳の葉の紅井
のまは御人向ふ遊ぶも山賊の

根路を通ふ花の陰はしむる
の月清き山と出雲の山も
あり又或時は織姫のほろ
まも入る枝の葉もさく
な身を直人を即ちわき
目よみぬ心もわんれを
蟬の唐衣のめ神はく
月よもつれらちま人の
あもも輝かきし理よ
つわ山うがわあれ都の時
せがうりも分りま
執りたうら松は行
の山姥が山白のま
来乃 山あり 一樹乃 陰一乃 流

春... 爲... 其... 爲... 其...
 爲... 其... 爲... 其...
 爲... 其... 爲... 其...
 爲... 其... 爲... 其...
 爲... 其... 爲... 其...

春... 爲... 其... 爲... 其...
 爲... 其... 爲... 其...
 爲... 其... 爲... 其...
 爲... 其... 爲... 其...
 爲... 其... 爲... 其...

して是れ大紅蓮の氷を戴く氷室の
 下は氷の窟なりはちまきつる類きたる
 氷室の窟はちまきつる類きたる
 もめやく氷のたもと地す萬境を
 うつる鑄のてく地す萬境を
 戸よりあきつるあきつるあきつる
 きりて岩の氷をいりまきろ
 が井の氷よとらむきりてあきつる
 下は氷の窟なりはちまきつる類きたる
 氷室の窟はちまきつる類きたる
 も氷の窟なりはちまきつる類きたる

依りて氷の窟なりはちまきつる類きたる
 下は氷の窟なりはちまきつる類きたる
 氷室の窟はちまきつる類きたる
 も氷の窟なりはちまきつる類きたる

劫のさとして育王山青龍寺般若
 室の聖僧がして慢のたゞは皆
 神道も禪もまじらぬかあはは
 日本のお國あれは神國として佛は
 今うまゝありせも同くかゝり
 慢のまじりまゝして國をたはぶ
 つては自由の心を違ふ人
 儲きても思食まのあたは神
 國の天地開闢より此方を北國より
 北より南へくるかゝりまじり
 は教のあまざるも日本なる天を北より
 南へくるかゝりまじり使
 ありて天を北より法を北より教を
 又密宗の真義より入 顯密無學

のりあひて 執りて此の類ひて
 たりとも何ひ 珍なる事 蟻蝦が
 等とも猿猴が月よあひてあ
 らざらんも何れも神慢増上慢
 の慢もまんと思ひつる人の脚
 力をいよく争つるより 力を
 明王の誓約まじりてあはれ其利
 益よりいふはえがく火の三時よ
 入して一切の魔軍を焚焼せり
 外なる魔軍の相をさしきりて
 心の慈悲の法恵が不動の心を
 但主の心をあはれ中なる有難
 悲願の心をあはれ心を捨て乃
 道にまじりて魔境をさしきりて

こころも打たぬらんく 柳見
多大僧の天狗の首領 善果房と我
方せりもわらわら 柳見
行乃親念をさるるあさる 中若作障
早有一佛 庵境に花あり 痛り
袂界れ 柳見
清也 且ま 庵境のしんま 柳見
流き 柳見
邪法 柳見
一かして 凡を不二あり 自覚清浄
天 柳見
藤林 柳見
まを 柳見
明玉 柳見

伽十二天 柳見
後天 柳見
をま 柳見
西よ 柳見
吹 柳見
地 柳見
乃 柳見
佛 柳見
ま 柳見
ま 柳見
ま 柳見

あめは油のほろりたる
支那精のまじりて
乃後一層法界の
霜ののちりたる
乃花さけりまじり
一花さけりまじり
日影さけりまじり

色香なきもの
女
あめは油のほろりたる
支那精のまじりて
乃後一層法界の
霜ののちりたる
乃花さけりまじり
一花さけりまじり
日影さけりまじり

草の秋も
霜の秋も
花の秋も
葉の秋も
虫の音の秋も
てもあめは替り
あめは油のほろり
乃後一層法界の
霜ののちりたる
乃花さけりまじり
一花さけりまじり
日影さけりまじり

是れを以て（女）是の都
 二百方と（平）者ありしに、
 一人と成たりし者、
 其の獨りなれ形見の翠子（女）
 離れて福も思ひのれ（平） 扱と
（女）も子と成者ありし者、
 是れを以て（女）是の都
 二百方と（平）者ありしに、
 一人と成たりし者、
 其の獨りなれ形見の翠子（女）
 離れて福も思ひのれ（平） 扱と
（女）も子と成者ありし者、
 是れを以て（女）是の都
 二百方と（平）者ありしに、
 一人と成たりし者、
 其の獨りなれ形見の翠子（女）
 離れて福も思ひのれ（平） 扱と
（女）も子と成者ありし者、

是れを以て（女）是の都
 二百方と（平）者ありしに、
 一人と成たりし者、
 其の獨りなれ形見の翠子（女）
 離れて福も思ひのれ（平） 扱と
（女）も子と成者ありし者、
 是れを以て（女）是の都
 二百方と（平）者ありしに、
 一人と成たりし者、
 其の獨りなれ形見の翠子（女）
 離れて福も思ひのれ（平） 扱と
（女）も子と成者ありし者、
 是れを以て（女）是の都
 二百方と（平）者ありしに、
 一人と成たりし者、
 其の獨りなれ形見の翠子（女）
 離れて福も思ひのれ（平） 扱と
（女）も子と成者ありし者、

御書付申上り候事
 一、御書付申上り候事
 二、御書付申上り候事
 三、御書付申上り候事
 四、御書付申上り候事
 五、御書付申上り候事
 六、御書付申上り候事
 七、御書付申上り候事
 八、御書付申上り候事
 九、御書付申上り候事
 十、御書付申上り候事
 十一、御書付申上り候事
 十二、御書付申上り候事
 十三、御書付申上り候事
 十四、御書付申上り候事
 十五、御書付申上り候事
 十六、御書付申上り候事
 十七、御書付申上り候事
 十八、御書付申上り候事
 十九、御書付申上り候事
 二十、御書付申上り候事

御書付申上り候事
 一、御書付申上り候事
 二、御書付申上り候事
 三、御書付申上り候事
 四、御書付申上り候事
 五、御書付申上り候事
 六、御書付申上り候事
 七、御書付申上り候事
 八、御書付申上り候事
 九、御書付申上り候事
 十、御書付申上り候事
 十一、御書付申上り候事
 十二、御書付申上り候事
 十三、御書付申上り候事
 十四、御書付申上り候事
 十五、御書付申上り候事
 十六、御書付申上り候事
 十七、御書付申上り候事
 十八、御書付申上り候事
 十九、御書付申上り候事
 二十、御書付申上り候事

そらへも徳もあまふ事なること

蔵殿のはなもはな思ふほどに

しる直もすゝめりやいりて

ともも思ふはつた思ふはつた

もいりたりとすれどいり

度思ひふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

心も思ふも思ふはつた思ふはつた

侍人思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

思ふ思ふも思ふはつた思ふはつた

の頃の様子は路の口出る和子に
たしむるに
其時調子さき入の渡口の歌
同様の
見晴て
も野も
その
香路の
の頃
すまひ
の
すまひ
すまひ

の頃の様子は路の口出る和子に
たしむるに
其時調子さき入の渡口の歌
同様の
見晴て
も野も
その
香路の
の頃
すまひ
の
すまひ
すまひ

右也

四方の山に雲霧の如く雲霧の如き
 久しきの 杉原のめまの神戯
 何某との我力也。我流度都より
 洛陽の衣冠をみりて見はてると又
 小野右左衛門馬場の花とて感あり
 也。取回今を言ふ右左衛門馬場の花と
 詠めつやと名のハヤ雲行があふわ
 志る人極まりなく雨降ふあふわ
 もめりたたの陰あふわあわ客ん
 松のきの行もあふわ梢よりあふ
 わ森もちぢづくわ右左衛門馬場よ
 雲霧の如く 雲霧の如く
 右左衛門馬場よまはせしやうまはせし

花とて詠めつやと名のハヤ雲行があふわ
 志る人極まりなく雨降ふあふわ
 もめりたたの陰あふわあわ客ん
 松のきの行もあふわ梢よりあふ
 わ森もちぢづくわ右左衛門馬場よ
 雲霧の如く 雲霧の如く
 右左衛門馬場よまはせしやうまはせし
 興とつやまはせしやうまはせし
 花とて詠めつやと名のハヤ雲行があふわ
 志る人極まりなく雨降ふあふわ
 もめりたたの陰あふわあわ客ん
 松のきの行もあふわ梢よりあふ
 わ森もちぢづくわ右左衛門馬場よ
 雲霧の如く 雲霧の如く
 右左衛門馬場よまはせしやうまはせし

日暮の影もやほりてささけく
 長閑の影もほりてささけく
 馬場の影もほりてささけく
 文も影もほりてささけく
甲つる影もほりてささけく
 語思もほりてささけく
 の目も影もほりてささけく
 もほりてささけく
 まも影もほりてささけく
 可も影もほりてささけく
 ちれりてささけく
 右の馬場もほりてささけく
 なく車もほりてささけく

かくも今又我れよよ業平の
 行もあやめりてささけく
 社もあやめりてささけく
 一もあやめりてささけく
 今又もあやめりてささけく
 もあやめりてささけく
 森もあやめりてささけく
 ありてささけく
 志もあやめりてささけく
 一もあやめりてささけく
 車の欄もあやめりてささけく
 いちもあやめりてささけく
 心もあやめりてささけく

伊弉册... 天照大神の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...

伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...

伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...

伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...

伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...
伊弉册の御代に... 伊弉册の御代に...

女郎花

早田

是は九洲松浦方より出づる僧より
我未だ初とてなる程の秋思の立
都よりうらみの松浦の里を
たづねてかくも思ふにひの秋思
かこつては松浦の道に
逢ふれくも早田の
国は遠くもや人のあまを
給ふ石清久の備言をばはらば
守佐の言はしむるも
と思ふは人の思ふは
と感て笑れては言ふの詠も
おもふ思ふは人の思ふは
松の花をよみては思ふは

とくみく虫の音はもはらば
野草花をたづねて松浦の
松雨をよみては思ふは
おもふ思ふは人の思ふは
名茶の思ふは人の思ふは
れた花一本をよみては思ふは
乃思ふは人の思ふは
絵をよみては思ふは
俗呼んで思ふは人の思ふは
くだる僧をよみては思ふは
や思ふは人の思ふは
花乃思ふは人の思ふは
手折絵をよみては思ふは
おの思ふは人の思ふは
おの思ふは人の思ふは

付たあもほしや女貴若乃古事などひ
 つく敷きさやも徳をうさく作
 女貴若と申さう男山ははなさいと
 れさくく女山乃麓は男塚女塚と
 ていとみきくへさあ人ほくへ入
 女塚又山乃方あ女塚ごう男墳
 女塚よつて女貴若乃謂もは是のま
 婦乃人の女中うくへ 甲 梅具女奴
 の人女國行くを字のる中人もは
 女都乃人男山乃備はまより頼
 風とさし人上男いさもく人
 語もみかありはなぶ文あはな
 指くまればもふらひは便を思ひなり
 かまのまきく月よさめわく夢乃

早上鳥のうろたへりく 長あは
 男鹿乃角のつらうちあつ陰より
 女七蓮はごうぬはのきなは
 南無女を遊離は免領證菩提
 のめ廣野へ穢あり我古墳あや
 存もろず 骸とありし徳敷き
 横すもあまはまひらりやまけ
 を昔乃秋の月い染らるひら
 女あはつらつまよりのあ
 女山乃角乃女貴若乃のまは
 頭もたひらりも新乃清法はあ
 早上鳥のまほ七蓮のあはれ給ふま
 女あはつらつ都の信者彼頼乃
 子集ふまほは 女あはつらつ

夢... 骨... 成罪... 花... てな...
夢... 骨... 成罪... 花... てな...
夢... 骨... 成罪... 花... てな...

開寺小町

茶... 詩... 秋... 是... 開寺... 伯備... 織... 陰... を... 甲... 織... 錦...
茶... 詩... 秋... 是... 開寺... 伯備... 織... 陰... を... 甲... 織... 錦...
茶... 詩... 秋... 是... 開寺... 伯備... 織... 陰... を... 甲... 織... 錦...

てもゆりきりの霧の命成さるう
 きの音もあつたかたのあつた
 思ひ出たあつたあつたあつた
 名も賣して今もあつたあつたあつた
 一まきあつたあつたあつたあつた
 宿はあつたあつたあつたあつた
 ともあつたあつたあつたあつた
 扇車のおもひあつたあつたあつた
 枕つちあつたあつたあつたあつた
 ろきあつたあつたあつたあつた
 今もあつたあつたあつたあつた
 園寺の鐘もあつたあつたあつた
 れもあつたあつたあつたあつた
 内のもあつたあつたあつたあつた

草乃戸は親とあつたあつたあつた
 一まきあつたあつたあつたあつた
 ろきあつたあつたあつたあつた
 婦のあつたあつたあつたあつた
 かつたあつたあつたあつたあつた
 扇車のおもひあつたあつたあつた
 今もあつたあつたあつたあつた
 一まきあつたあつたあつたあつた
 宿はあつたあつたあつたあつた
 ともあつたあつたあつたあつた
 扇車のおもひあつたあつたあつた
 枕つちあつたあつたあつたあつた
 ろきあつたあつたあつたあつた
 今もあつたあつたあつたあつた
 園寺の鐘もあつたあつたあつた
 れもあつたあつたあつたあつた
 内のもあつたあつたあつたあつた

神も今うらやまの浅まや痛
やめあそびぬも神と實き七
クノジク手向れぬももとのあふ
急行のききめりぬももとのあふ
なる童舞の袖も面白き星
なり鳥竹の 歌もよみて身行
まゑ しく久しゆも萬歳樂

豊面白うさうの帯れ袖や首豊
乃あうらの五葉の帯姫の袖と
あ度な びんが是の又七タれ手向の袖
あふ七なるもくや多人も寝人
まゝ不寝人も走らぬも今れ童
舞の袖はひらく寝人寝きぬ人
百年も年百のたは宿り胡蝶

のまじい 氣ありく 考なれたら
けと袖も手懸れ 帯もきよう
たよも波れ 立まな夜ひく人
昔よなる袖のあつた 帯も
れいしんやあ 去留の初ねの
衣もも明方の開き鏡 鳥も
志なりよ 昔わたり東雲のあふ
あもあふく けりくのたろく
くももよきあ けりくのたろく
そと枝よもわりのあふく
わらもよ婦もきり百年の帯
あふりよ 果の名味もきり

自然居士

加振之者ハ東山雲居寺レアリ
 住居ハ者ウキ。爰ニ自然居士ト
 唱メタルハ居ノハ百說法ニ御
 宣ハシ百結願キテ此旨ハ皆クま
 ツリテ聽クモノ。雲居寺造管乃
 托ニレテ代カケテノ曹升寺見ヨリ
 程ハカヘテヨリ法一府宜シク
 尊師高僧ナリテ。然ルニウチ
 教白一代教王釋迦牟尼
 寶號ニ世乃諸佛十方ノ菩薩ト
 ナルベシ。ト極テハ心經
 也。是ハ神傳モテチケリ。此觀
 ハウチキム神クモテ息ツテ此觀

誦文ヲシテ見ル。教自リテ調誦
 ノリテ三寶者僧ノ法布施一裏ノ
 子々ウチキム海ニ親クモテ頓悟ル
 果ノ為テノ代カケニ三寶ハ修長
 示メタル西天ノ食カケニ夜ニ僧
 子供デレノゾノ夜ノ世ノ縁今ノ
 食カケ親ノチケリ。代カケナ
 神ノ中ニモウチキム。然ル
 然ル諸君ノ同シ曇ヲキミトテ誤
 アズ。自然若キ雲法師神トナル
 ナリ。聽カケル。神トモテ
 ナリ。加振之者ハ東山方
 ノ人高令。我々廣都ノ人ナル
 人ノ實カケテ人々十四五計成シテ費

取て人が明日が乃同眼をばして作
程もやうくいふま縁ひんあひ渡り
作うが乃がまき者親乃福善と
やんていへんつひに福善の徳敷
かゝるにまき者親乃福善と
昔もなまき者親乃福善と
¹²年 ¹³年 ¹⁴年 ¹⁵年 ¹⁶年 ¹⁷年 ¹⁸年 ¹⁹年 ²⁰年
取て人が明日が乃同眼をばして作
程もやうくいふま縁ひんあひ渡り
作うが乃がまき者親乃福善と
やんていへんつひに福善の徳敷
かゝるにまき者親乃福善と
昔もなまき者親乃福善と
¹²年 ¹³年 ¹⁴年 ¹⁵年 ¹⁶年 ¹⁷年 ¹⁸年 ¹⁹年 ²⁰年

やう有きまき者親乃福善とあまき
のまき者親乃福善の代まき者
ていへんつひに福善の徳敷
昔もなまき者親乃福善の為よ。
取て人が明日が乃同眼をばして作
程もやうくいふま縁ひんあひ渡り
作うが乃がまき者親乃福善と
やんていへんつひに福善の徳敷
かゝるにまき者親乃福善と
昔もなまき者親乃福善と
¹²年 ¹³年 ¹⁴年 ¹⁵年 ¹⁶年 ¹⁷年 ¹⁸年 ¹⁹年 ²⁰年

榜訃とつらう^{シテ} 榜訃といふ^{シテ} 拾
 考行^解 余^{シテ} 余^{シテ}
 ちやう^解 ちやう^解
 中^解 中^解 中^解 中^解
 あり^解 あり^解 あり^解 あり^解
 是^解 是^解 是^解 是^解
 わ^解 わ^解 わ^解 わ^解
 う^解 う^解 う^解 う^解
 中^解 中^解 中^解 中^解
 あり^解 あり^解 あり^解 あり^解
 あり^解 あり^解 あり^解 あり^解
 あり^解 あり^解 あり^解 あり^解
 あり^解 あり^解 あり^解 あり^解
 あり^解 あり^解 あり^解 あり^解
 あり^解 あり^解 あり^解 あり^解

自然若き息づく舟の如く
 船余乃人なきは世なる人
 舟の類のものにありて人
 自然若き息づく舟の如く
 船余乃人なきは世なる人
 舟の類のものにありて人
 自然若き息づく舟の如く
 船余乃人なきは世なる人
 舟の類のものにありて人

百八十八 鳥江のついでに...
 百八十九 鳥江のついでに...
 百九十 鳥江のついでに...
 百九十一 鳥江のついでに...
 百九十二 鳥江のついでに...
 百九十三 鳥江のついでに...
 百九十四 鳥江のついでに...
 百九十五 鳥江のついでに...
 百九十六 鳥江のついでに...
 百九十七 鳥江のついでに...
 百九十八 鳥江のついでに...
 百九十九 鳥江のついでに...
 百 鳥江のついでに...

百八十八 鳥江のついでに...
 百八十九 鳥江のついでに...
 百九十 鳥江のついでに...
 百九十一 鳥江のついでに...
 百九十二 鳥江のついでに...
 百九十三 鳥江のついでに...
 百九十四 鳥江のついでに...
 百九十五 鳥江のついでに...
 百九十六 鳥江のついでに...
 百九十七 鳥江のついでに...
 百九十八 鳥江のついでに...
 百九十九 鳥江のついでに...
 百 鳥江のついでに...

ひびく 早行
ありきく一歩を歩くと
てきき入 本末教のほろ青く
ふきき入 雲の影をま
ふきき入 雨の音を
ふきき入 池の氷の
きき入 教の
きき入 言の
きき入 法
きき入 道
きき入 入
きき入 都
きき入 入

大會

早行 一時代 教法 五時 後をきく
教内 教外 ともに 五時
華嚴 阿含 方 般若 法華 四教
と 見 慈 通 心 正 行 志 也 教 主
乃 秘 藏 之 王 又 想 以 衆 衆
用 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
し 心 有 秘 法 法 法 法 法 法 法 法
乃 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也
願 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也
實 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也
矣 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也
古 殿 之 燈 也 也 也 也 也 也 也 也
あつて 名 也 也 也 也 也 也 也 也

山頭よりなる流瀧の月を戴き洞
 窟の朝一行の雲をくもり出陣の
 僧の影をさしあけたりけり
 雲をくもりあけたりけり
 けりあけたりけり
 けりあけたりけり
 志らく松を又まきし
 ありあけたりけり
 尋ねてわたりけり
 比給へて秋をいましめたりけり
 けりあけたりけり

唐の南より傳へたる
 水も昔も今も同じ
 事なりけり
 まりけり
 集りて
 出陣の
 けりあけたりけり
 けりあけたりけり
 けりあけたりけり
 けりあけたりけり
 けりあけたりけり

名は... 色をたのまきぬ...
... 此の人の...
... 年月を送る...
... 書を行...
... 給をぬき...
... 志ん多き...
... 有...
... 供人...
... 針...
... 書柳の...
... 志んぬ...

... 頼...
... 彼...
... 岩戸...
... 百...
... 早振...
... 名ありぬ...

さうくし越路のとも思ふや致社たる
かめし 相模の人をよ 伊勢の
三市後行のひるり雲ま 海幸陸
房 弁慶の先陣の途を成て 皇
後より十二人のまゝあまの核染油
かまのき露をわけてけりあうりて
いつは入障りもいづちも白雲の越路に
まよらうとありさうもさうらう
二月のつぎまげらふ十日の夜月
京都のまゝと日暮や津がもぬも
わわくく震るまゝの相模の
山崎の震るまゝの相模の
海路通より海人の海津の浦よ
さよきり東をまや明行の津葉久

つとく地山や海宮若久
津垣や松のまゝ山崎の松をま
たの松山人のつとく行瀬のま
津洲津やまの三國の津のま
海原波よまゝのつとくま
花の津浦よまゝのつとく
程のまゝやまの津のま
此の津浦のまゝのつとく
あやの弁慶 津前ま 相模の
人のつとく通のつとく
わやのつとく 伊勢の津の
まゝの山崎のつとく 相模の
言談道場のつとく 物や相模の
向まゝのつとく 相模のつとく

三人のまじりしるは 抄書に記す
依り判官殿の 旨にうつりて 記すの無き
一人を 誅せしむるに 功あり
是を 誅せしむるに 功あり
言禁固の 功あり
家期の 勤と 功あり
すまの 功あり
いづく 家期の 勤と 功あり
ついでに 功あり
不動明王の 功あり
ついでに 功あり
胎息の 功あり

又やうの 功あり
すまの 功あり
いづく 家期の 勤と 功あり
ついでに 功あり
不動明王の 功あり
ついでに 功あり
胎息の 功あり
すまの 功あり
いづく 家期の 勤と 功あり
ついでに 功あり
不動明王の 功あり
ついでに 功あり
胎息の 功あり

して餘は南月もあけの日は暁も付し
 酒をまじりまじりしりあて方ぞはかしく
 行くともし入 母はくはくしたる
 花よは初余をかくては南月もあけ
 のまじり南守の星は酒をまじりか
 きたるてん 神無月もあけ
 はあまもあまもあまもあまもあまも
 ひとりあまもあまもあまもあまもあまも
 花よは初余をかくては南月もあけ
 のまじり南守の星は酒をまじりか
 きたるてん 神無月もあけ
 はあまもあまもあまもあまもあまも
 ひとりあまもあまもあまもあまもあまも

曲水のて手まつりしりあまの袖に
 や舞をまじりしりあまの袖に
 遊僧もひまの村の和ふまの
 水乃流るる 雲はひくくも あまの龍
 乃水 絵解ての星をまじりか
 のまじり南守の星は酒をまじりか
 きたるてん 神無月もあけ
 はあまもあまもあまもあまもあまも
 ひとりあまもあまもあまもあまもあまも
 花よは初余をかくては南月もあけ
 のまじり南守の星は酒をまじりか
 きたるてん 神無月もあけ
 はあまもあまもあまもあまもあまも
 ひとりあまもあまもあまもあまもあまも

五七 東

水をたぐりて身入る池に樹
僧はくく月下の心入人師
有花のきく夜の初あり見佛
園はのすく頃年の縁きわ
あつたき秋きまらり
洞窟の木の月一輝あり
かて出来美様のまきみ
つる月影の地を相とえり
東山陰陽の時節ときよ
たすし妻の衣のすき夜の園
あやめ梅のさし色も
まがハ陽を影かかぬ

人きく愛しきしと泉
式部がふりて方丈の室
とみえり夢の實をまらり
はあぐ笑よき

蟬丸

定めておき世にすくすくも
転て成候 皇仁正書第四卷
所子蟬丸の宮をたたりまひ
やけりも 酢かきまはせり
世のいままゝいんてし
と成候くを 蟬丸
や候 两眼青ましく
よ月日の老あく 圃
暗りてでかぬ雨も
明しうらみ 帝
敷きや 候
逢坂山よ 榊
なれと 繪言

り候りおまれども 初
なく 又の車志の
乃より 隆
も 候
又つら 候
いふ乃 行
いぬの 行
清貫 前
山よ 道
後よ 見
くよ 捨
も 秋 君

BT 210

治め民をあたへしむるがめりて
の敷もへりしむるがめりて
お思ひもへりしむるがめりて
思ひ清貫らぬ人もあらずまき目
乃とせむる事お世のつらま
杜き故ありしむるがめりて
松らまへりしむるがめりて
た此よりてむるがめりて
乃世をたすむるがめりて
社成り親の慈悲もあまきま
上り物定むるがめりて
願ふ清くしむるがめりて
思ひまへりしむるがめりて
御出家してむるがめりて

らを絵ひて
をまへりしむるがめりて
しむるがめりて
まへりしむるがめりて
人の後にも有べしむるがめりて
乃とせむるがめりて
同くむるがめりて
お思ひもへりしむるがめりて
持しむるがめりて
よも年入ぬるがめりて
お思ひもへりしむるがめりて

つえ 安の所も逢坂山の用の方
けの目も物の行方 づえ極も
頼三郎 外帝は 松さく
青 頼三郎 外帝は 松さく
か 頼三郎 外帝は 松さく
先 頼三郎 外帝は 松さく
う 頼三郎 外帝は 松さく
く 頼三郎 外帝は 松さく
い 頼三郎 外帝は 松さく
あ 頼三郎 外帝は 松さく
て 頼三郎 外帝は 松さく
押 頼三郎 外帝は 松さく
ち 頼三郎 外帝は 松さく
深 頼三郎 外帝は 松さく
び 頼三郎 外帝は 松さく
第 三 万 石 七 千 七 百 七 十 七 也 我

皇子の心はさかたの因果の故
やらん心よりく 狂れし 色なき
縁の相念もつて 翠人の髪をわす
まよひの心はさかたの因果の故
あまのまの心はさかたの因果の故
行 頼三郎 外帝は 松さく
あまのまの心はさかたの因果の故
相 頼三郎 外帝は 松さく
わ 頼三郎 外帝は 松さく
の 頼三郎 外帝は 松さく
あ 頼三郎 外帝は 松さく
て 頼三郎 外帝は 松さく
行 頼三郎 外帝は 松さく

